

三田の文人



慶應義塾大学文学部開設百年記念「三田の文人展」実行委員会編

丸善株式会社

三田の文人

慶應義塾大学文学部開設百年記念
「三田の文人展」
実行委員会 編

江苏工业学院图书馆
藏书章

丸善株式会社

三田の文人

平成二年十一月十五日 発行

編者 慶應義塾大学文学部開設百年記念

「三田の文人展」実行委員会——責任者：古屋健三
© 1990

発行者 海老原熊雄

発行所 丸善株式会社

郵便番号 一〇三 東京都中央区日本橋二丁目三番十号

組版・印刷 富士美術印刷株式会社／製本 株式会社星共社

ISBN 4-621-03535-5 C0091

三田の文人
目次

『三田の文人』ご挨拶	小谷津孝明	1
巻頭随想		
三田の文人たち	佐藤 朔	7
伝統の灯	田中千禾夫	10
カタパルト付近	野口富士男	12
対 談		
三田のパーソナリティ永井荷風	安岡章太郎・遠藤周作	15
福沢諭吉の文体	江藤 淳	32
鷗外・敏・荷風／荷風招聘をめぐる経緯	松村友視	44
社会にむかう詩心／万太郎・瀧太郎・春夫	田久保英夫	59
戦争と三田の作家たち／原民喜・堀田善衛の場合	高野清見	67
戦後の三田文学		
並木通り留守番記	坂上 弘	75
われもまたアルカディアに	若林 真	82

対談

三田の詩人たち

吉増剛造・岡田隆彦

91

三田の秀歌

鉄幹の評価

村木道彦と大島史洋

岡野弘彦

岡井隆

110 107

三田の秀句

万太郎・白水郎・元・憲吉

荷風以後の俳人たち

清崎敏郎

江國滋

116 113

学統の開基／折口信夫と慶應義塾

非政治的演劇芸術を追求した人々／新劇を中心とする

三田の演劇人たち

西村亨

宮下啓三

119 128

三田と歌舞伎

戸板康二

136

三田の批評

江藤淳——存在の不安

高山鉄男

山本健吉——鎮魂としての批評

古屋健三

139 143

三田と私

白井浩司／大久保房男／村松 暎／三好京三／岡田 睦／佐藤方哉
江森國友／渡辺 保／夏樹静子／村松友視／巽 孝之／萩野アンナ

147

三田を歌った詩

知 識

折口信夫

夜 想

原 民喜

酒、歌、煙草、また女

佐藤春夫

最終講義

西脇順三郎

医と文

なだいなだ

エロスの情景さまざま

高橋昌男

三田の異国旅物語／春夫・大学・光晴

岡谷公二

三田のエンターティナーたち

荒俣 宏

三田のユーモア

草森紳一

三田と映画

宮林 寛

三田の児童文学

桑原三郎

224 216 203 197 187 181 175

163 162 161 161

三田の文学者とその時代	167
三田の異国旅物語一覧	196
三田の文学者と映画（作品リスト）	219
アンケート——三田「この一編」	233
学生が選んだ三田の文学	246
三田の文学略年譜	255
三田の主要文人リスト	262

題字——佐藤 朔

『三田の文人』ご挨拶

文学部長 小谷津 孝明

明治二十三年一月、慶應義塾は従来の英学塾から脱皮し、より高度な専門教育を行う学塾たるべく、文学、理財、法律の三科よりなる大学部を発足させました。したがって本年度、現在の文、経済、法の三学部は共に開設百年を経たこととなります。省みれば百年の道は決して平坦ではなかったようであります。たとえば開設後、各科の入学者数が予想外に延びず、その存続が危ぶまれた時期がありました。しかし日本の現状と将来を見据えた福澤先生は、逆に大学部の整備拡充こそが必要と考えられました。その英断と熱意が次の大学部維持革新の氣運を呼んだのです。

明治四三年には文学科は文学、史学、哲学の3専攻を独立・分化させ、教授陣の充実をはかりました。特に文学専攻では「文壇における活動力を高めるべし」と、当時顧問を委嘱された森鷗外、上田敏らが動いて、永井荷風を招へいし、小山内薫、戸川秋骨、小宮豊隆らを加えることとなります。ご承知のように、荷風は就任するや『三田文学』を編輯し、久保田万太郎、水上瀧太郎、以下多くの文人が輩出する礎をつくりました。その時からすれば、本年は『三田文学』創刊八十年記念の年でもあります。

このような節目の年にあたって、私たちは記念行事の一つとして「三田の文人たち」というテーマで、遺稿等の展示会―三田の文人展―を中心に、出来るだけのことをしてみようということに致しました。責任者を古屋健三君（仏文学）とする実行委員会が組織されました。コンセプトは「過去を大切にする精神にこそ意味のある現在も意義のある未来も生まれる」といったところでしょうか。文学部と文学の来し方・行く方々を思うこともあったと思います。

展示会に関しては早速丸善株式会社の全面的なご協力を頂けることになりました。

展示会にはカタログはつきものですが、古屋君ののめりこみ様は正にももの凄く、展示資料の拝借のお願いに奔走する一方で、安岡章太郎・遠藤周作両氏の対談を始め、三田文学にゆかりの深い方々からの主題別特別寄稿や「三田、この一篇」のアンケートをお願いして掲載してはといった企画、三田文学年譜の作成等々の案を次々に打ち出し、実行に移して来ました。これでは並のカタログでは到底納まりがつかないであろうと心配しておりましたところ、その意気と企画内容に感じて下さったのでしょうか、丸善からは、これを単行本『三田の文人』として出版しては、というお申し出を頂きました。

ここに『三田の文人』がこのような姿で刊行出来ましたのは、三田文学に縁の深い方々がご寄稿やら対談等に快よく応じて下さり、また丸善のご好意がありましたお蔭です。企画側の一人として、これらの方々に深く感謝申し上げます。次第です。

ところでご記憶の方も多いと思いますが、『溷東綺譚』の「作者贅言」に、「昭和二年初めて三田の書生及び三田の紳士が野球見物の帰る群をなし隊をつくって銀座通を襲ったことを看過するわけには行かない。（中略）そのころ、わたくしは経営者中の一人から、三田の文学も稲門に負けないやうに尽力していただきたいと言はれて、その愚劣なるに肩を並めたこともあった。彼らは文学芸術を以て野球と同一に視ていたのであった。わたくしは元来その習癖よりして黨を結び群をなし、其威を借りて事をなすことを欲しない。むしろ之を怯となして排けてゐる。」という件があります。私自身はスポーツが好きで、特に野球をおとしめて見る気持ちはありませんでしたので、初めこのところを単に、野球の早慶戦のあと一部の塾生が銀座でとった無遠慮な集団行動を批判したもの、そして荷風が古い銀座を愛し狭斜の人情を愛する一方でこと文学に関しては孤高反俗の人であったこと、を物語るものとしてしか受けとめておりませんでした。

しかし、続けて荷風が神代帚葉翁との親交を回想しながら、「今の世の中のことはこれまでの道徳や何かで律するわけには行かない。スポーツの流行、ダンスの流行、旅行登山の流行、競馬その他博奕の流行、みんな欲望の發展する現象だ。それは個人めいめいに、他人よりも自分の方が優れてゐるといふ事を人にも思はせ、また自分でもさう信じたいと思つてゐる。優越を感じたいと思つてゐる欲望です。明治時代に成長したわたくしにはこの心持ちがない。あつたところで非常にすくないのです。」と翁が語つた言葉を引用している段に来て、ハッとしました。ノーベル賞を辞退した、あのパステルナークが歌つた「欲望について―何がたいせつか」という詩の一節が浮かんで來ました。

創造の目的は 献身にあり

評判でもなく 成功でもない

つかうかうかと みんなの口に

のぼるのは 恥ずかしいことだ

.....

ほかの人々は 生きた足跡をたどつて

一歩一歩 おまえの道をくるだろう

けれど 敗北と 勝利とを

おまえ自身が區別してはならぬ

(稲田定雄訳)

私は心理学を専攻する者ですが、優越の希求と劣等の隠蔽がいかに人間をそしてその社会を根強く支配してきたか、そしてその結果が今どう出ているのか、また、エリクソンという発達心理学者によればそこにこだわっている人の成長段階は未だ半ばにすぎぬことなどを、自分の問題としてもいや応なく思い出させられました。私はほんとうに「現

実を通して人間の、自己のころのおくに潜むものを理解する」ことの大切さを教えられたと思いました。しかしそのように認識する自我も所詮は小我であって結局は自我の一部、いわんや自己全体からすればそのほんの一部にすぎないのでありましょう。大我にいたる道は極めて遠い感があります。しかし前進の一步ではあったように、自分を慰めました。

文学にこういう面から接するのは特殊に過ぎるかもしれませんが。美の追求としての文学を考える方も居られましょうし、そんな肩肘を張らずに自然な姿勢で接していたいという方も居られましょう。鵬外は『追儼』の始めの部分で「小説は何をどう書いてもいいものである」と言います。その本当の意味は深いのですが、読者の側からしますと「どう読んでもいいものである。」と言うことも出来るように思います。

この『三田の文人』もいろいろな方がいろいろな心でお読み頂いてよいのだと思います。作品は一度完成されて作家の手を離れたら、独り歩きを始めます。ですから、それより仕様ががないと言うべきなのかもしれません。ただ、新しい世紀を目前にして、今ほど人間に対する根源的理解が必要な時代はないように思います。その意味では、一人でも多くの方々、特に学内にいる私としては若い学生諸君に、私たちの先達がそれぞれの時代に人間をめぐって何をどのように考えて来られたかを改めて見つめる時をもち、多様な人間存在に対する理解を一層深める機会にして頂ければと願っております。

(平成二年十一月十日)

卷頭隨想

三田の文人たち

佐藤 朔

三田の文人たちといっても、大学中心に教育面の変遷を考える場合と、文芸雑誌「三田文学」の長い歴史を振り返るときと、内容がずいぶん変わってくる。それにさらに三田の文学部で学んだ人たちと、そこで教えていた人たちの話を結めると、ますますもって複雑になる。しかし簡略にすれば人名と数字羅列だけになって、全然おもしろくない。そこで私は個人的な思い出をもとに、あれこれ書くことにする。

三田の文学部の文学科だけを考えても、戦前と戦後ではまるでちがう。戦前の文学科は、要するに本好きの若者が少しばかり集まっていたようなものだ。彼らは自分の将来のことなどはあまり気にせず、漫然と三田山上をうろついていた。旧制大学のことだから、予科と本科の六年制で予科を経済学部や法学部で過し、本科のときに、文学部に籍を変えた者がかなりいた。中途退学者も少なくなく、いつの間にか三田山上から姿を消した若者がいた。私も本科になるとき、経済学部から文学部の英文科に変わり、しかも再度仏文科に移ったりした。

学生数はきわめて少なく、上級生を全部入れても十名ほどで、教室に出て来るのは、僅か二、三名だった。しかし、文学科には個性的な若者が多く、のちに学者や作家になり、また演劇、音楽、絵画の方面に進む者もあり、中には演劇界で活躍する者もかなりいた。文学科といってもいわば脱領域的であり、学際的といってもいい自由な雰囲気包まれていて、この点は現在の文学科にも通じるところがいささかある。現在は学生数が比較にならぬほど多くなっている点は大違いである。

話を「三田文学」に限ると、やはり永井荷風まで戻らないわけには行かない。明治四十三年（一九一〇）に、彼が

森鷗外、上田敏の推輓で、文学部の教授になり、「三田文学」の編集責任者になってからのことは、どうしても振返ることになる。荷風は教室ではフランス文学を担当していたが、学者ではないので、彼の文人としての魅力が絶大で、その著述が衆目を集め、ひろく影響を与えるところとなった。荷風も「三田文学」には毎号何かと小まめに書いていた。そして文学史的には三田風なロマン主義が育成されたことになったが、それは必ずしも三田出身の文人たちだけで築きあげたものではない。学生数が少ないから卒業生が沢山いる筈はなく、荷風の編集のころの「三田文学」は、荷風好みの文人や荷風と親しい、または荷風に憧れていた新人たちの作品が大部分であった。

新人というのは、堀口大学、佐藤春夫、久保田万太郎などのことで、彼らは「三田文学」の一周年記念号のあとになって漸く誌面に名前を連ねている。しかも佐藤春夫は入学してから教室にはほとんど顔を出さず、三年後には中退し、堀口大学は一年後に、外交官だった父親の後を追って海外に去っている。

大正五年、荷風は教職から身を引くと同時に「三田文学」の主幹を辞したが、そのちも雑誌は続刊している。しかしいろいろな事情で何回も休刊になっている。

大正十五年以後は、水上瀧太郎が中心となり、三田出身の文人が各分野に擡頭するようになった。雑誌そのものは学閥にとらわれることがなく、いつも解放的であった。荷風のころはひろく、外国文学をしきりに紹介していたが、ときに哲学的な論文を多く掲載したこともあり、意外な人物が珍しい外国文学を翻訳したり、哲学者がその思索の一端をこの雑誌で発表したりしている。次第に、作家が傑作をものにして、文学賞を受けたり、あるいは作品が映画やドラマに、またラジオで人気を博したことも少なくなかった。「三田文学」がひとつの芸術運動の先駆的役割を果たしたこともあり、大衆娯楽的な文学や芸術で新機軸を拓りひらいた人物を産んだりもした。文芸雑誌「三田文学」はリトルマガジンとしてこのように各方面の実験や試行に対して、いつも舞台を提供して来たのである。

この雑誌も、敗戦直前の昭和十九年の末には休刊の止むなきに至ったが、戦後早くも昭和二十一年（一九四六）には復刊している。

慶應義塾大学は、昭和二十四年から新制大学と変り、文学部も男女共学となり、学科やカリキュラムが一変し、学生数は急に激増することになった。昭和二十九年に大学院が出来てからは、どの学科もアカデミックになり、研究者を志す者も多くなった。他方、依然として作家や評論家、演劇を目ざす者があり、幾多の新人が果立って行つた。そのために「三田文学」に新たに作品を発表する者もあり、他方、この雑誌に係りなく世の中に出て行つて認められる者も少なくない。学問の世界に入つた者は、それぞれの学会誌を通じて、その業績を公けにし、芸術、演劇、放送などの分野では第一線の現場で活躍しながら、国の内外でそれぞれ成果を競演している。

現在の「三田文学」は、季刊誌として復刊して六年目だが、創刊以来から通算すると八十年目になる。編集者の方針で他の文芸雑誌とは異つた雰囲気があり、外国文学に関するエッセーが多く、いつも詩篇掲載のためにページを割いている。どこか荷風時代の「三田文学」と通ずるものが感じられる。雑誌は大学の組織とはちがつて、旧制も新制もなく、また派閥もなく、昔ながらの自由闊達の雰囲気が漂っている。学問的な研究論文は学会誌に任せて、世界文学的視野で一人の作家について語つたり、各国の文学イメージを比較しながら追求したりするエッセーは、いろいろな示唆に富んでいる。

三田の文人たちには、ディレクタントらしさが免れがたいようだが、最近の小説欄でみると、意外にも写実主義的な丹念な描写が緻密になされていることがある。そして一般に都会風の憂鬱が、さまざま形式で器用に、または無器用に、構築されているように見受けられる。古くからの気まぐれな読者として、私には、そのところがいかにもおもしろい。